〝人間の誇り〟を感じながら

藤田庄市

初冬の寒気が身にしみた。

就労闘争の開始日、一九七八年十一月二十一日。指名解雇に服すまいとする人々と行動を共にした。解雇されるいわれのないことを必死で訴えるのを聞き、彼らが、「人間の大切なものを失うまいとしているな」と幾度か思った。

駈け出しカメラマンのころから労働運動の取材には、比較的かかわってきたほうだ。七〇年代初期、三十パーセントをこえる賃上げ率を獲得した時の春闘の熱気も知っている。ところが、「石油パニック」から経済の「低成長」の時代になるや、呆気にとられるほど労働運動は精彩をなくしていった。同時に、各地で人員整理の声が聞こえだした。あの熱気はどこへやら、例外はあっても、労働側はやられっ放しである。

沖電気の指名解雇撤回闘争の開始は、そんな時代の流れを感じていたなかでのことだった。沖電気の問題は先端技術を扱う大企業のことであり、三井三池以来の大量指名解雇、規模も大きかった。腰をすえて取材しよう、寒気のなかでそう思ったものである。

それまでよく見かけた労働運動のグラビアは、スト・デモ・コブシばかりが多かった。それでは、労働者個人が見えにくいのだ。当時、農民もよく撮っていたが、農民の場合だと、家庭と仕事が一体である。だから、口先でなんと言おうと田畑や家族との触れあいを見れば、その人がなんとなくわかってくる。労働者は、そうはいかない。格好よく言ったり振るまったりに、案外まどわされてしまいかねない。そこで、なるべく私生活の領域をも撮るようにした。新婚の金子夫妻がほっぺたをくっつけているという争議写真が、かくして出来あがる。

もっとも、金子さんの結婚式は、前もって取材を申し込んだところ拒否された。解雇直後で、世話役がひどく神経をとがらせていたのだった。

奥さんが妊娠中に夫婦そろって首を切られた東田さんはじめ、幾人ものお宅にズカズカと無礼にも入りこんだものだ。こうして、「沖電気争議支援中央共闘会議」が結成されるころまで、争議団を諸側面から撮りつづけた。争議団にとって夢中であったであろう、前半の四年間強の時期である。

あらためて密着(ベタ)を見直してみて気づいた。三年めまでは笑っていてもどこか顔が緊張しているのであるが、八一年もすぎるとそれが薄れてきている。いっぽう、表情の清潔さは同じであった。人間の誇りというものを感じさせる。何故か、「ああ、勝ってあたりまえだなあ」との思いがつきあげてきた。

つきあいの続いた理由として、多くの争議団員の〝だらしなさ〟(誤解されると困るのだが)がある。僕は、いわゆる労働運動の闘士タイプというのが、あまり好きではない。その点、彼らは、「闘士」とはかけはなれていた人が多かったので気楽だった。解雇撤回闘争といえば、ふつう相当な決意と覚悟をもって臨む。また、労働運動の経験もある人というのが通り相場だ。ところが、沖電気争議団の場合、一部の人はともかく、どうもそうしたこととは無縁のまま争議に入った人もいたようだ。区労協の何たるかを知らないのはともかく、当時の総評と同盟の違いも知らない人がいたのにはびっくりした。だが、世間一般では、そのことはさほど驚くことでもないだろう。やる気をなくして寮でフテ寝していても、こっぴどく批判をされたというのも聞かない。大企業のカゴの鳥だったのが解き放たれて、争議を楽しんじゃった、といったら言い過ぎだろうか。撮影する側も、いっしょに楽しんじゃった、という面があるのである。労働界の再編が動き続けた中で、〝だらしなさ〟まで率いた指導部や支援の労組幹部の御苦労は、察するに余りある。

沖電気争議を記録したのは、僕の誇りである。この取材で、マネーゲーム狂奔に象徴される世情を見すえるひとつの足場を、得たように思う。これからも、いつでもどこでも、胸をはって争議団の人と会えるような生き方をしてゆこうと思っている。